唐詩

心のリズム

松浦友久 著

著者略歴

松浦友久（まつうら　ともひさ）

1935年　静岡県に生まれる

1963年　早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了

《現　在》 早稲田大学文学部教授　文学博士

《著　書》『李白—詩と心象』『唐詩の旅—黄河篇』（以上，社会思想社）『李白研究—抒情の構造』（三省堂）『詩語の諸相—唐詩ノート』（研文出版）『中国の名詩鑑賞—中唐』（共著，明治書院）等

《現住所》 東京都三鷹市井の頭3—8—12

© Tomohisa Matsuura 1972

唐詩—心のリズム—　Printed in Japan

1984年5月30日　初版第1刷発行

著　者　松浦友久
発行者　小森田一記
発行所　株式会社 社会思想社
東京都文京区本郷1—25—21
☎本社813-8101 営業813-8105
振替東京6-71812 郵便番号113
印刷　株式会社 平河工業社
製本　株式会社 小林共文堂

本書の定価はカバーに明記してあります

落丁・乱丁は小社にお送り下さればお取替えいたします　0098—60152—3033

唐詩

―心のリズム

唐詩

―心のリズム

松浦友久著

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

解説――唐詩を読むために――……一三
第一章　詩人とその時代……一四
一、唐詩の地位　一四
二、四唐区分　一五
三、各説　一六
第二章　抒情の形式……二三
一、詩の定義　二三
二、唐詩の分類　二四
三、詩型と韻律　二六
四、詩型と表現機能　二三

五言絶句（その特色について）……三九
鸛鵲楼に登る　王之渙　四一
易水送別　駱賓王　四三
鏡に照らして白髪を見る　張九齢　四四
秋浦の歌（其の十五）　李白　四五
秋浦の歌（其の四）　李白　四七
春暁　孟浩然　四八
鹿柴　王維　四九
竹里館　王維　五〇
秋夜　丘二十二員外に寄す　韋応物　五一
隠者を尋ねて遇わず　賈島　五三
江雪　柳宗元　五四
秋日　耿湋　五五
楽遊原に登る　李商隠　五六
酒を勧む　于武陵　五八
臨高台　黎拾遺を送る　王維　六〇
南楼の望　盧僕　六二
絶句　杜甫　六三
雑詩　王維　六五
静夜の思い　李白　六六
秋風の引　劉禹錫　六七
子夜四時の歌　春歌　郭震　六九
春怨　金昌緒　七一
復た愁う　杜甫　七三
農を憫れむ（其の一）　李紳　七五
同（其の二）　李紳　七六
七言絶句（その特色について）……七九
涼州の詞　王翰　八一
涼州の詞　王之渙　八三

従軍行　王昌齢　八五
出塞　王昌齢　八七
磧中の作　岑参　八九
夜　受降城に上りて笛を聞く　李益　九一
隴西行　陳陶　九三
閨怨　王昌齢　九四
邙山　沈佺期　九六
蘇台覧古　李白　九七
越中覧古　李白　九八
秦淮に泊す　杜牧　一〇一
金陵の図　韋荘　一〇三
九月九日　山東の兄弟を憶う　王維　一〇四
春夜　洛城に笛を聞く　李白　一〇七
除夜の作　高適　一〇九
桑乾を度る　賈島　一一〇
夜雨　北に寄す　李商隠　一一三
楓橋夜泊　張継　一一三
郷に回りて偶ま書す　賀知章　一一五
絶句　杜甫　一一八
山行　杜牧　一二〇
江南の春　杜牧　一二二
懐いを遣る　杜牧　一二三
江楼にて感を書す　杜牧　一二五
元二の安西に使するを送る　趙嘏　一二五
芙蓉楼にて辛漸を送る　王維　一二九
魏二を送る　王昌齢　一三三
重ねて李評事に別る　王昌齢　一三五
黄鶴楼にて　王昌齢　一三七
孟浩然の広陵に之くを送る　李白　一三八
董大に別る（其の一）　高適　一四〇
同　（其の二）　高適　一四二
江南にて李亀年に逢う　杜甫　一四三
淮上にて友人と別る　鄭谷　一四四

五言律詩（その特色について）……一四七
杜少府　任に蜀州に之く　王勃　一四九
洞庭湖を望みて張丞相に贈る　孟浩然　一五三
山居秋暝　王維　一五六
新平の楼に登る　李白　一五九
月夜　杜甫　一六三
春望　杜甫　一六四
月夜　舍弟を憶う　杜甫　一六七
旅夜　懐いを書す　杜甫　一六九
岳陽楼に登る　杜甫　一七一
賦して　古原の草を得たり　送別　白居易　一七三
儲邕の武昌に之くを送る　李白　一七六
七言律詩（その特色について）……一八一
黄鶴楼　崔顥　一八三
酒を酌みて裴廸に与う　王維　一八六
蜀相　杜甫　一八〇
野望　杜甫　一九二
返照　杜甫　一九五
秋興　杜甫　一九八
登高　杜甫　二〇二
長安の春望　盧綸　二〇五
左遷せられて藍関に至り　姪孫湘に示す　韓愈　二〇八
八月十五日夜　禁中に独直し　月に対して元九を憶う　白居易　二一二
楽天の　八月十五夜　禁中に独直し月を翫でて　寄せ見るるに酬ゆ　元稹　二一六

香炉峰下　新たに山居を卜し　白居易　二一七
草堂　初めて成り
偶ま東壁に題す

咸陽城の東楼　許渾　二二一
錦瑟　李商隠　二二五

古体詩（その特色について）……二三一

春江花月の夜　張若虚　二三三
白髪を悲しむの翁に代る　劉希夷　二四〇
送別　王維　二四六
貧交行　杜甫　二四八
衛八処士に贈る　杜甫　二五〇
胡笳の歌　顔真卿の使して河隴に赴くを送る　岑参　二五五

茅屋秋風の破る所と為るの歌　杜甫　二五九
兵車行　杜甫　二六五
新豊の臂を折りし翁　白居易　二七三
炭を売る翁　白居易　二八三
長恨歌　白居易　二九一

作者小伝……三一九
関係年表……三三七
関係地図……三六六
あとがき……三六八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡例

一、この巻には、唐詩九十五首を収める。選択に当たっては、作品の完成度と後世への影響という点から、盛唐の詩を中心とした。

一、詩の本文については、『全唐詩』（中華書局活版本）を底本とし、各詩人の別集や『唐詩選』『唐詩三百首』『三体詩』等を参照した。

一、漢字は、原詩を独立して提示する部分のみ旧字体。その他、訓読、解説等は、すべて新字体とした。

一、かなづかいは、訓読のばあいを含めて、すべて新かなづかいとした。

一、中国古典詩の注解には、大別して、訳注方式と評釈方式がある。本書では、一つの試みとして、訳注の形式を基本としながらも、評釈の要素を大幅にとり入れた。個々の作品が個別的に理解されるだけでなく、それらが一つの流れのなかで系統的に読み進められるよう、表現上、構成上の配慮を加えた。

唐詩——心のリズム

解説

――唐詩を読むために――

相思　　相思（そうし）　王維（おうい）

紅豆生南國　　紅豆（こうとう）　南国（なんごく）に生（しょう）じ
秋來發幾枝　　秋来（しゅうらい）　幾枝（いくし）か発（ひら）く
願君多採擷　　願（ねが）わくは　君（きみ）　多（おお）く採擷（さいけつ）せよ
此物最相思　　此（こ）の物（もの）　最（もっと）も相（あ）い思（おも）う

恋ごころ

紅き実は南にそだち
秋まちてひらく幾枝（いくえだ）
君いまぞ採りたまわずや
相い思う愛の実なれば

第一章　詩人とその時代

一、唐詩の地位

唐詩は中国文学の珠玉だといわれる。たしかに、そこに歌われた世界は豊かで美しい。唐詩のイメージをかりていえば、それは南海にとれる真珠のように、あるいは西域に産する白玉のように、さまざまな明暗を含んで輝いている。

『詩経』に始まる二千数百年の文学史の流れのなかで、七世紀の初頭から十世紀の初頭まで、およそ三百年のこの時間が、唐詩と唐詩人の世界である。中国文学史の中心が韻文史にあること、そして、韻文史の中心が唐代にあることは、今日ほぼ定論であるといってよい。

このことは一般的にいえば、文学をめぐるさまざまな条件、たとえば、言語、風土、思想、宗教、政治、社会、経済などが、さまざまに関連しあいながら生みだした中国文学史としての特色である。この点を、もう少し唐代の情況に即して具体的に考えてみると、唐詩が高いレベルに達した直接の要因としては、およそ次の四点が指摘できるようである。

一、新しい詩型（絶句・律詩など）の成立による新しい表現力の開発。

二、国情の多様化（南北の統一・西域との交流など）に伴う題材の多様化。

三、歴代の天子の詩文愛好。

四、科挙（官吏登用試験）における詩賦の採用。

はじめの二つは、主として詩歌それ自体の変化にかかわるものであり、あとの二つは、作者層の拡大・拡充にかかわるものである。四者はそれぞれに原因となり結果となって、唐詩の発達をうながした。このばあい、四点のうち一、二、四の三つまでが、いずれも唐代になって生まれた新しい条件であることは注意されてよい。六朝末期までに徐々に蓄積されてきた韻文史上のさまざまな可能性は、こうした新しい条件をえて、質量ともに急速に開発された。現在までの唐詩研究の結果によれば、現存の作品は約四万九千五百首（正確には四九、四六九首）、作者は約三千人（二、九五五人）に及んでいる（『唐代の詩人』『唐代の詩篇』）。すでに失なわれて今日に伝わらないものを考えれば、おそらくこの何倍かの詩と詩人とが、唐代には存在したわけであろう。

二、四唐区分

こうした厖大な対象を全体的にとらえることは容易でないが、そのための一つの試みとして、唐代を四期に分ける考えかたが行なわれてきた。いわゆる、初唐、盛唐、中唐、晩唐、の四期区分である。この区分は、考えかたの原型としては、南宋末期の『滄浪詩話』（厳羽）に始まるものと見てよいであろう。ただしそこでは、唐初体、盛唐体、大暦体、元和体、晩唐体、の五期に分けられており、後世にいう〃中唐詩〃は、大暦体と元和体とに二分されている（同書「詩弁」「詩体」）。

今日見られる四期区分を最初に示したのは、現存の資料では、明代初期の『唐詩品彙』（高棅）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com